

黙示録としての『銀河鉄道の夜』

——「初期形」への一視点——

中野新治

「銀河鉄道の夜」は多く作者宮沢賢治を作品に重ねることによって読まれて来た。主人公ジョバンニの疎外感や孤独は「社会的被告^(註1)」という自覚に生きた作者と重ねられ、友達のカムパネルラは早逝した妹トシ、あるいは疎縁となつていった親友保阪嘉内の投影と考えられた。ジョバンニの旅する「幻想第四次空間」は賢治のユートピア幻想の具象化であると指摘された。それぞれに充分根拠のあることであるし、それが賢治に特例的なことであるわけではない。かつて丸谷才一氏は、夏目漱石が「こころ」の先生の自殺の動機づけとして乃木將軍殉死を導入したのは、漱石が徴兵忌避者であり、その深層心理に日清、日露の戦死者に対する罪の意識があつたためであると指摘した^(註3)。その当否は別としても、このような論述が成立するのは、作品の最大の問題が「先生」はなぜ自殺したかにあるからである。主人公はなぜそうしたのか？なぜそうなのか？そこに作品のテーマは集中して現われる。社会的な通念や宗教による先験的な回答ではない、作者固有の人間の生や世界への認識が、別言すればヒュ

ーマニテイのすべてがこの「なぜ？」に集約されるのである。だが、作品は必ずしも合理的で明快な「なぜ？」に対する回答を寄せてくれるとは限らないから、テクストの解説にプレテクストとしての作者や時代背景が援用されることは必然的な作業となる。しかし、このようにして作家が作品の中に導入されることが要請されるとしても、「銀河鉄道の夜」の場合、死んだら万才と唱えてもらいたいと言つた漱石の「こころ」に於けるようには作家と主人公の距離は近くはないことをまず確認しておかねばならない。初期形、後期形とも冒頭から主人公の孤独と疎外は強調されるが、現実の作者はそれらを恐れも嘆きもしなかつたのである。

ある時一つの御城に参りました、(中略)その国の広い事、人民の富んでいる事、この国には生存競争などと申す様なつまらない競争もなく労働者対資本家などという様な頭の痛める問題もなく総てが楽しみで総てが真であり善である国でありました、決して喜びながら心の底で悲しむ様な愛人も居ませんでした、(中略)王子は永い旅に又のぼりました、なぜなれば、かの無窮遠のかなたに離れたる彼の友達に誠は彼の兄弟であつたからであります

黙示録としての『銀河鉄道の夜』——「初期形」への一視点——

した、それですから今でも歩いているでしょう、（「旅人のはなし」から）

わたくしはどこまでも孤独を愛し／熱く湿った感情を嫌いますので／もし万一にもわたくしにもっと仕事をご期待なさるお方は／同人になれと云ったり／原稿のさいそくや集金郵便をお差し向けになつたり／わたくしを苦しませぬようおねがひしたいと存じます（「春と修羅」第二集序）

大都郊外ノ煙ニマギレントネガヒ、マタ北上峽野ノ松林ニ朽チ埋レンコトヲオモヒシモ、父母ニ共ニ許サズ、廢軀ニ葉ヲ仰ギ、熱惱ニアヘギテ、唯父母ノ意僅ニ充タンヲ翼フ（「雨ニモマケズ手帳」）

「旅人のはなし」からは二十二歳、「春と修羅」第二集序」は三十二歳であり、「雨ニモマケズ手帳」のメモは三十六歳のものと推察される。明らかなように、生涯を通じて「孤独」はむしろ熱望されている。最初期の散文「旅人のはなし」からは、主人公はこれ以上望みえないような理想的な国の王子であったのであり、父は手を広げて迎え入れようとするが王子は国に留まろうとはしない。はてしもなく遠い友（兄弟）と再会できるとは思えないが、彼は孤独な旅を選ぶのである。

ここで「銀河鉄道の夜」に於けるジョバンニの仲間からの疎外と町はずれの丘への逃避が、父の不在と罪の嫌疑から端を発していることを考えれば、「旅人のはなし」から」がちょうどその裏返しの世界になることは注目に価する。つまり、「銀河鉄道の夜」の状況設定は作者のそれを反映しているというよりも、むしろそれを逆倒し

ていると言った方が正しいのだ。極言すれば賢治は父の「不在」こそ望んだのであり、病床にあつてのメモの真摯さを疑えないとすれば、彼は死を前にしてなお若き日の永遠の旅人たらんとする願いを反芻していたのである。であれば、ジョバンニの孤独は、その未完成にもかかわらず作品の中で充分解きうるはずである。ジョバンニのカンパネラとの別離、「みんながカンパネラだ」という決意に作者の痛切な体験が反映していることは勿論のことである。だが、現実での苦難↓悲哀↓啓示↓浄化↓現実への参入という主人公の辿る道筋が、宗教的回心の一つの典型であることを考えれば、主人公の悲哀は別の意味を持つ。以下、作品の構造をより明確化することですべてそれを果してみたい。テクストには初期形を使用する。孤独とその止揚というモチーフは読者として想定された「アドレッセンス中葉」の少年少女たちへのメッセージであるが、それがより熱く語られるのが初期形であるからである。

二

キリスト教とその信仰者たちが与えた賢治への影響については、すでに佐藤泰正氏や上田哲氏を中心に秀れた指摘がある。法華信者ではあつても聖書をすみずみまで読んでいたことは、終末部に登場する「プレシオスの鎖」が旧約聖書「ヨブ記」の「プレアデスの鎖」によると考えられることからも了解できるし、「みんながめいめいのじぶんの神さまがほんとうの神さまだというだろう、けれどもお互ほかの神さまを信ずる人たちのしたことも涙がこぼれるだろう」というジョバンニを悟す黒い帽子をかぶった人の言葉は、そ

のまま賢治のキリスト教への姿勢であるにちがいない。無教会派のクリスチャン斎藤宗次郎、バプテスト派宣教師ヘンリー・タツピン、カトリックの神父テルマン・ブジェなどと深い親交のあつた賢治にとつて、キリスト教は単なる一つの宗教的理念にとどまるものではなかつたのである。

このような賢治が、その創作の集大成ともいふべき「銀河鉄道の夜」で、聖書の記事を単に宗教的な幻想性を高めるイメーヅの断片としてではなく、作品の構造そのものとして使用したと考えることは充分に可能であると思われる。具体的には「ヨハネの黙示録」を取り上げる。作品がいかに黙示録的な本質に根ざしているか、あるいは、にもかかわらず逸脱し、逆の本質を持つているかを見極めることが本論の課題である。まず、「黙示録」とは何か、が明らかにされねばならない。

①、「黙示」(アポカリユプシス、アポカリプス)とは隠された事柄(秘密、秘義、奥義)が顕わになること、見えないものが見えるようになること。これらは本来神のみに属する事柄で、人間は知ることを許されないものである。

②、①はいずれも神が特定の人間に秘密を啓示するという形をとる。枠組としては、筆者(異現象を見る者)が天使に導かれてまぼろしを見、さらにその意味の解き明しをされるという構造を持つものが多い。

③、啓示されるのは将来の出来事であるが、その意義は現在へ直接かわり現在を規定する。

黙示録としての「銀河鉄道の夜」——「初期形」への一視点——

④、「奥義」に関しては二つの側面がある。宇宙の秩序や天体の性質、運行、天界や陰府などの領域に関する宇宙的な面と、人類や世界の将来、特に近づいている現世の終末と人類の審判などに関する時間的、歴史的側面である。

⑤、④のうち重要なのは後者、つまり「時」に関する奥義である。この世は終末に近づいており、やがて来る「大いなる患難の日」と、審判によつて神の支配が確立するという期待と、それがいつどのようにして来るかということが啓示される。「これはエノクが災いの日、すなわち邪悪で不信仰なものが、ことごとくとりぞかれる日に、生きのこる選ばれた義人たちを祝福したことである。」(旧約聖書「エノク書」序言)

では、作者に直接影響を与えたと思われる「ヨハネの黙示録」とは何か。

⑦、成立はローマ帝国、ドミティアヌス皇帝の統治時代(A・D 81~96)の終り頃と考えられる。ドミティアヌス帝は生存中帝国のすべての臣下から神としての尊崇を受けることを要求し、そのためイエスを神の子と信ずる者達を圧迫、迫害した。

⑧、「ヨハネの黙示録」が聖書に入るべき正典として全キリスト教会から承認されるまでには曲折があり、正式に編入されたのは四世紀後半である。

⑨、「ヨハネの黙示録」の要点。(引用は日本聖書協会版による)
a、受難とそれ故の啓示。「わたしヨハネは、神の言ことばとイエスのあかしとのゆえに、(流ながされて)パトモスという島にいた。ところがわたしは、主の日に御霊に感じた。そして、わたしのうしろの方

で、ラッパのような声がするのを聞いた。」(1章9節以下)

b、選ばれた者への啓示。「勝利を得る者には隠されているマナを与えよう。また、白い石を与えよう。この石の上には、これを受け

る者のほかだれも知らない新しい名が書いてある。」(2章17節)

c、選ばれた者の権力の獲得。「勝利を得る者、わたしのわざを最後まで持ち続ける者には、諸国民を支配する権威を授ける。彼は鉄のつえをもって、ちやうど土の器を砕くように、彼らを治めるであらう。」(2章26節以下)

d、七つのラッパが鳴り、迫害者への過烈な災いが次々と起る。

「彼ら(いなご)は、人間を殺すこととはしないで、五か月のあいだ苦しめることだけが許された。彼らの与える苦痛は、人がさそりにさされる時のような苦痛であった。その時には、人々は死を求めても与えられず、死にたいと願っても、死は逃げていくのである。」(9章5節以下)「その災厄の様子は悪魔的なものにまで拡大している。」(NTD新約聖書註解)

e、千年王国。最後の審判。新しい世界の誕生。(20章・21章)

⑩、歴史観。歴史は次第に発展し、成熟し、最後に完成に到達するのではない。むしろその終末は世界をあらゆる人間に対する審きであり、この終末(世界の滅亡)こそ神の支配による新しい世界の始まりである。

⑪、見者ヨハネと使徒ヨハネの相違。両者は同一視されることもあったが、全く違う人物と考える方が適切である。見者ヨハネ……黙示録的歴史像をキリストの十字架、復活、再臨と結合させた。これによって諸教会の苦難の意味を示し、励ましと慰めを与えようとし

た。使徒ヨハネ……信する者はいまここで全き救いを受けるのである。終末は必要ではない。

⑫、「ヨハネの黙示録」の価値づけ。カルヴァン(Jean Calvin 1509~1564)は新約聖書のすべての文書について註解書を書いたが、「ヨハネの黙示録」については書かなかった。ルター(Martin Luther 1483~1546)はこの書を「使徒的権威のあるものとも預言的権威のあるものとも見なすことができない」と述べ、ただ信者の慰めと、信仰的な躓きを避ける警告としてのみ意味を認めた。

以上が諸註解書に基づく黙示録の世界と「ヨハネの黙示録」の概要である。「銀河鉄道の夜」がそれを忠実になぞったものでないことは明らかであるが、右の諸項目を鏡とすることで作品の構造と本質を照し出すことは可能であらう。以下、詳察する。

三

主人公カンパネラの孤独感と疎外感「ぼくはどこへもあそびに行くところがない。ぼくはみんなから、まるで孤のように見えるんだ」という独白に集約されている。彼はいわば異類であり、山男が里に住めぬように人々の輪の中に入っていくことができないのである。父の不在と母の病気による貧困を少しでも助けるため、彼は朝は二時間かかりの新聞配達、夜は活版所での活字ひろいに従事する。子供にとって生きることと同義である遊ぶ時間が奪われる。父の密漁と傷害による収監の疑惑がそれに追いつける。 「お父さんから、らっこの上着が来るよ」という「投げつけるような」ザネリの一言で、ジョバンニは祭りの喜びからもはじき出されるので

ある。こうして主人公は「にわかにならちからいっばい」町から走り出る。

「銀河鉄道の夜」とは「ケンタウルス祭の夜」とは異質の、「もう一つの夜」の存在を示した題名に他ならないが、それが「夢」であるにせよ、「もう一つの夜」の秘義の世界に参入する資格は、かくも生の場所を奪われた者にしか与えられないのである。それは「黙示録」が国土を失ったユダヤ民族に示されたことや、⑦の「ヨハネの黙示録」成立の契機と一致する。②や⑨のaに従って言えば、作品は「神」ならぬ「ブルカニロ博士」がヨハネならぬジョバンニを選び、「天使」ならぬ「セロのような声」に導かれて天上に向い、最後に「みんながカンパネラだ」という啓示を受けるという構造を持つのであり、それはジョバンニが知らないうちにポケットに持っていた「いちめんの黒い唐草のような模様の中に、おかしな十ばかりの字を印刷した切符」が⑨bの見者ヨハネが受け取る「受ける者のほかは誰も知らない名前が書いてある白い石」に通じることでも明らかである。

こうしてジョバンニは「ぼくはもう空の遠くの方へ、たった一人で飛んで行ってしまいたい」という願い通りに、天上の世界へ参入する。

ジョバンニは、走ってその渚に行つて、水を手にひたしました。けれどもあやしいその銀河の水は、水素よりもっとすきとほつてゐたのです。それでもたしかに流れていたことは、二人の手首の、水にひたつたところが、少し水銀いろに浮いたように見え、その手首にぶつつかつてできた波は、うつくしい燐光をあげて、ち

らちらと燃えるやうに見えたのでもわかりました。(北十字とプリオシン海岸)

この辺ではもちろん農業はいたしませんけれども大いひとりりていいものができるやうな約束になつて居ります。農業だつてそんなに骨は折れはしません。たいてい自分の望む種子さへ播けばひとりりでとんどんできます。(ジョバンニの切符)

多くの指摘があるように、これらの天上界の諸相が賢治の科学や宗教や音楽の知識と、それに基づく想像力の結果であることはいうまでもない。

御使はまた、水晶のように輝いているいのちの水の川をわたしに見せてくれた。この川は、神と小羊の御座から出て、都の大通の中央を流れている。川の両側にはいのちの木があつて、十二種の実を結び、その実は毎月みのり、その木の葉は諸国民をいやす。

(「ヨハネの黙示録」22章1節以下)

衆生、劫尽きて、大火に焼かるるを見る時も、我が此の土は安穩にして天人常に充滿せり、園林、諸の常閑、種種の宝をもつて莊嚴し、宝樹華果多くして衆生の遊樂する所なり(「法華経如来寿量品第十六」)

他にウィリアム・モリス (William Morris 1834~1896) の「ノートピアだより」、ジョン・バンヤン (John Bunyan 1628~1688) の「天路歷程」の影響等も指摘されている。しかし、ここで本論の文脈上、黙示録に限って比較するなら、それが同じくノートピアであっても「銀河鉄道の夜」の場合、「ヨハネの黙示録」に於ける⑨d、e、のような虐げられたものと虐げたものとの逆転、神による

過烈な審きが欠落していることに注目せねばならない。勿論、「銀河鉄道の夜」は死後の世界を扱ったものであり、「ヨハネの黙示録」と同列に論じ切るには無理があるのだが、通常の伝承民話や童話が多かれ少なかれ黙示録的な結末を持っていることを考えれば、虐げた者の代表であるザネリが救われ、ジョバンニをよく理解し、それに加わらなかつたカンパネラがザネリのために溺死するというこの作品の設定が、相当に特異なものであることがわかるであろう。「ヨハネの黙示録」の右のような本質こそ⑧の事実をひき起し、カルヴィン、ルターに⑨のような態度を取らせたものであろうが、現代に於ても例えばD・H・ロレンス(D・H・Lawrence 1885~1930)はその延長上に極めて厳しい評価を与えている。

この貴重な書を二三度読めばすぐ気づくこと、それはあきらかに、聖ヨハネはおおわらわで選民、すなわち神に選ばれたる民以外の人間をことごとく抹殺し剿滅しつつして、己れのみはまぢかしくなく神の御座へ這いのぼろうと、大がかりな奸計をめぐらしているという事実である。(中略)かかる教理こそ、いついかなる晩でも、救世軍や、あらゆるべゼル、乃至はペンティコスト教会であきるほど耳にするものである。それはイエスに非ずしてもヨハネであり、福音書ではないにしても黙示録である。それこそは思想に富める宗教とは似ても似つかぬ俗人の宗教なのだ。(傍点原文)

ロレンスはここで抑圧された民衆の裏返された権力意志を鋭くえぐっているのだが、賢治がそれと無縁であったことを言うために右を引用したのではない。賢治もまた、明白にこの世の終末と審きを

夢想したことがあったのである。

あつちもこつちも／ひとさわきおこして／いっばい呑みたいやつらばかりだ／羊歯の葉と雲／世界はそんなにつめたく暗い／けれどもまもなく／さういふやつらは／ひとりで腐って／ひとりでに雨に流される／あとはしんとした青い羊歯ばかり／そしてそれが人間の石炭紀であつたと／どこかの透明な地質学者が記録するであらう(「詩ノート 一〇五三政治家」)

風が吹いて／日が暮れかゝり／麦のうねがみな／うるんで見えること／石河原の大小の鍬／まっしろに発火した／また芽れて死ぬる支那の苦力や働いたために子を生み悩む農婦たち／またこの人たちが／みなうつゝとも夢ともわかぬなかに「云う／おまへらは／わたくしの名を知らぬのか／わたくしはエス／おまへらに／ふたゝび／あらはれることをば約したる／神のひとり子エスである。(「詩ノート 一〇四九基督再臨」)

昭和二年の春に書かれたこれらの作品は、「銀河鉄道の夜」初期形の成立後、実践活動へ踏み出してからのものである。現実により密着し、農民たちの辛苦や愚劣を知れば知るだけ、賢治にもまたこの世の根底からの浄化と神の支配が夢想されたのであろう。しかし勿論、これらの心情は後期形へ向けての推敲の過程でも作品の中に持ちこまれることはなかつた。「よだかの星」に明白なように、賢治の場合、虐げられた者はそれによって自己もまた虐げる者であることを知りこそすれ、立場を逆転することを夢みることはないのである。

以上の文脈から言えば「銀河鉄道の夜」に示された天上の美しい

風物や自在な食物は、単に地上の辛苦の裏返しのエトピアとして夢想されたものではないと言ふことができる。大正十三年八月十七日の日付を持つ「〔北いっばいの星ぞらに〕」はブレ「銀河鉄道の夜」とも言うべき重要な作品であるが、ここで作者は天上界を次のように描いている。

じつに今夜の何といふそのの明るさだらう／それが精緻な寶石類の集成だ／金剛石の大トラストが／穫れないふりしてしまつて置いた幾億を／みんないちどにぶちまけたとでもいふ風だ／頭のまわりを円くそり／鼠いろした粗布をきた／坊主らのいふ神だの天だのが／いったいどこにあるかと云つて／うかつに皮肉な天文学者が／望遠鏡をぐるぐるさせるその天だ／するとこんどは信仰のある科学者がどこかの星のあたりに／その天を見附けようとして／やっぱり眼鏡をぐるぐるまはす／さういふ風な明るい天だ／しかも三十三天は／やっぱりそこにたしかにあつて／木もあれば風も吹いてゐる／天人たちの恋は／相見えてえん然としてわらつてやみ／食も多くは精緻であつて／香気となつて毛孔から発する／間違もなく天使もあれば神もある／たゞその神が／あるとき最高唯一と見え／あるとき一つの段階とわかる／さふいふことかもわからぬ／（「先軀形A」部分）

「金剛石の大トラストが……とでもいふ風だ」はほとんどそのまま「銀河ステーション」の描写に転用されているし、「食も多くは……毛孔から発する」も燈台看守の口から説明される。「頭のまわりを……やっぱり眼鏡をぐるぐるまはす」は、「ぼくらからみる」と、ここは厚い立派な地層で、百二十年ぐらゐ前にできたといふ

黙示録としての「銀河鉄道の夜」——「初期形」への一視点——

証拠もいろいろあがるけれども、ぼくらとちがつたやつからみてもやっぱりこんな地層に見えるかどうか、あるひは風か水やがらんとした空に見えやしないかといふことなのだ。」というプリオン海岸の発掘現場での大学士の言葉に委容したと考えることができる。だが、それ以上に注目されるのは「〔北いっばいの星ぞらに〕」に見られるキリスト教と仏教の混在である。頭を丸くそつた修道士、天使、神と同じレベルで三十三天の实在が語られる。

三十三天とは初利天の別名であり、世界の中心にそびえ立ち仏法を守る帝釈天の住む須弥山（註8）の頂上に広がるとされるものである。「天界の分類は古代インド人の分類癖、羅列主義に基づくものであつて、それ自体に深い意味はない」という指摘に従つて、細部にこだわることとはやめるが、賢治が实在を確信する天上とはこのように宗教的な境界の取り扱われた（従つてキリスト教の絶対神も否定される）、人間を超える者が住む清澄な世界なのである。「銀河鉄道の夜」では十字架やシスターや復活のイエスを思わせる「神々しい白いきもの人」が登場し、著しいキリスト教的イメージがふりまかれるが、くりかえされる祈りの歌が「パレルヤ」でなく明らかに「ハレルヤ」であることや、「ほんたうの神さまはもちろんたつた一人です」「あゝ、そんなんでなしにたつたひとりのほんたうのほんたうの神さまです」という青年とジョバンニの噛み合ふ議論が交わされるところにも、作者の思いは明らかに究極の「神」は絶対無差別でなければならなかつた。もし人間が信仰によつて自己を超えようとするのならば、わが仏のみ尊しというエゴは否定されるはず

だからである。

「天人たちの恋は／＼相見てえん然としてわらってやみ／＼食も多くは精緻であつて／＼香氣となつて毛孔から発する」という天上のありようは、この「人間を超えろ」という意味では作者の地上での理想像であつたということもできる。もし食物が「精緻」であれば、便通も必要なく毛孔から揮発するのなら、人間自身がより「精緻」になれば、つまり感性や意識の階段をより高く踏み上げることができたられば、恋愛においても肉体的な抱擁は必要ではない、見つめあつて微笑めばそれで充分なのだ。賢治はこう言つていられるように思える。この視点から言えば、「銀河鉄道」の旅とは単なるユートピア幻想でも天界めぐりでもなく、すべての存在の階位がより高く、より「精緻」でありうることを知るための旅であつたと言ふことができる。

ひかりといふものは、ひとつのエネルギーだよ。お菓子や三角標も、みんないろいろに組みあげられたエネルギーが、またいろいろに組みあげられてきてゐる。だから規則さへさうならば、ひかりがお菓子になることもあるのだ。たゞおまへは、いままでそんな規則のところには居なかつただけだ。(銀河ステーション 傍点引用者)

するとこんどは、前からでもうしろからでもどこからでもないふしぎな声が、銀河ステーション、銀河ステーションときこえました。そしていよいよおかしいことは、その語が、少しもジョバンニの知らない語なのに、その意味はちゃんとわかるのでした。

(銀河ステーション 傍点引用者)

ね、ちよつとこの本をこらん、いゝかい、これは地理と歴史の辞

典だよ。この本のこの頁はね、紀元前二千二百年の地理と歴史が書いてある。よくこらん紀元前二千二百年のことでないよ、紀元前二千二百年のところみんなが考へていた地理と歴史といふものが書いてある。だからこの頁一つが一冊の地理の本にあたるんだ。いゝかい、そしてこの中に書いてあることは紀元前二千二百年ころにはたいてい本統だ。さがすと証拠もぞくぞく出てゐる。けれどもそれが少しどうかたと斯う考へだしてこらん、それ、それは次の頁だよ。紀元前一千年 だいぶ、地理も歴史も變つてるだらう。このときには斯うなのだ。變な顔をしてはいけない。ぼくたちはぼくのからだだつて手だつて天の川だつて汽車だつて歴史だつてたゞさう感じてゐるのなんだから……」(ジョバンニの切符 傍点引用者)

状況は違つていても同質のことが述べられている。物質的にも精神的にもわれわれが実体と考へ、感受しているものだけが絶対なのではない。感性と意識の階段をより高く登ることさえできれば、むしろ実体はなくそれは仮象であることがわかるし、仮象であると思われたものも感受できるようになる。人類の残した地理や歴史の相對性はそれを何よりよく証明しているのではないか……。ここには「唯物論要ハ人類ノ感官ニヨリテ立ツ。人類ノ感官ノミヨク実相ヲ得ルト云ヒ得ズ」というメモ(「兄妹像手帳」)や、「黒と白との細胞のあらゆる順列をつくり／＼それをばその細胞がその細胞自身と感じてゐて／＼それが意識の流れであり／＼その細胞がまた多くの電子系順列からできているので／＼畢竟わたくしとはわたくし自身が／＼わたくしとして感ずる電子系のある系統を云ふものである」(「詩ノ

トト一〇一六」という賢治独自の世界観が反映している。この点から言えば、ジョバンニを悟す「黒い大きな帽子をかぶった青白い顔の精せた大人」は、登場人物の中に作者を探する場合、真先に挙げられるべき人物であるかも知れない。

ともあれ、作者は決して難解なことを語っているのではない。ジョバンニの経験する不思議な世界は、心と身を澄ましさえすれば誰もが感受できるものではなかったか。

わたしたちは氷砂糖をほしくらるもたないでも、きれいにすきとほつた風をたべ、桃いろのうつくしい朝の日光をのむことができまます。またわたくしは、はたけや森の中で、ひどいぼろぼろのきものが、いちばんすばらしいびろうどや、羅紗や、宝石いりのきものに、かはつてゐるのをたびたび見ました。わたくしは、さういうきれいなたべものをすきです。これらのわたくしのおはなしは、みんな林や野はらや鉄道線路やらで、虹や月あかりからもらってきたのです。……（「注文の多い料理店」序）

天上では光がお菓子になったり、鳥がチョコレートになったりするという。だが、この地上でも美しい朝の日光を飲むことはいくらでもできるし、物事の変幻は自在である。少しも知らないはずの月や虹のことでさえいくらでも理解できるのだ。ジョバンニがブルカニコ博士から受けた「実験」とは、天上で知った「規則」を地上でも応用し、自己や世界を全く新しい姿で発見するためのものだった。地に降り立ったジョバンニは、賢治のように世界の驚きに満ちた美しさを感じてきたはずなのである。

黙示録としての「銀河鉄道の夜」——「初期形」への一視点——

四

「銀河鉄道の夜」に黙示録という照明を当てて見えてきたものは、その反黙示録的な本質であった。だが、「何かいろいろのものが一べんにジョバンニの胸に集つて何ともいへずかなしいやうな新しいやうな気がするのでした」とあるように、主人公に一つの回生が与えられる意味に於いて、やはり黙示録のわくぐみは守られている。ただそれは支配するための黙示録ではなく、つかえるための黙示録であり、自己がより「精緻」になるための黙示録である。別言すればそれは、未来が変容することによって現在を耐えるのではなく、自己が変容することによって未来を切り拓いていくものである。ジョバンニが車中で会ういかにも人の好い鳥取りや、他者を押しつけてまで生きようとしなかった青年や姉弟、その姉の口から語られる深い懺悔によって星になった蝸、そして何よりも友のために命を捨てた（初期形ではそう推察されるだけであるが）カンパネラの存在とは、自己という絞め木にかかったジョバンニを他者に向けて解放するためのものである。

「あの人どこへ行つたらう」カンパネラもほんやりさう云つていました。『どこへ行つたらう。一体どこでまたあふのだらう。僕はどうしても少しあの人に物を言はなかつたらう。』「あゝ、僕もさう思つてゐるよ。」「僕はあの人邪魔なやうな気がしたんだ。だから僕は大人へんつらい。」「ジョバンニはこんな変てこな気もちにはほんたうにはじめてだし、こんなこと今まで云つたこともないと思ひました」と、鳥取りによつて初めて他者の重みを明瞭に感じたジョバンニは、それでも「（あゝほんたうにどこまでもどこまで

も僕といっしょに行くひとはないだらうか。カンパネラだつてあんな女の子とおもしろさうに談しているし僕はほんたうにつらいなあ。」と自己の願いにこだわらる。しかし、ジョバンニを待つてゐるのはカンパネラとの別れである。カンパネラが友のために命を捨てたのである以上、カンパネラと共に行くとは、彼自身もまた他者のために自己を投げ出すことを辞さない生を送ること以外にない。「みんながカンパネラだ」というジョバンニの得た答はこの意味でまっとうであるし、カンパネラがおそらく反射的に溺死を救うべく飛び込んだに對して、ジョバンニにはより意識的な他者のための生が待つてゐることになる。

賢治は次のような日付あて先不明の書簡の下書きを残している。

たゞひとつどうしても棄てられない問題はたとへば宇宙意志といふやうなものがあつてあらゆる生物をほんたうの幸福に齎したいと考へてゐるものかそれとも世界が偶然盲目的なものかといふ所謂信仰と科学とのいづれによつて行くべきかといふ場合私はどうしても前者だといふのです。すなわち宇宙には実に多くの意識の段階がありその最終のものはあらゆる迷誤をはなれてあらゆる生物を究竟の幸福にいたらしめやうとしてゐるといふまあ中学生の考へるやうな点です。

この書簡に則して言えば、ジョバンニはブルカニロ博士によつて「意識の段階」を一段高く登つたのであり、「宇宙意志」を知つたのである。しかし、「三」で引用した天上の「規則」に関する部分は後期形ではすべて抹消された。勿論、ブルカニロ博士と共にそのメッセージを語る男も消え去つた。書簡は「ところがそれをどう表

現しそれにどう働いて行つたらいい、かまだ私にはわかりません」と締めくくられてゐる。書簡は晩期のものであろう。こうして賢治の「黙示録」は幻に終つたのである。

病床で推敲の筆を取る賢治に何が去来していたのかは、ここでは手に余る問題である。ただ、いったん書き上げた熱いメッセージに満ちた「黙示録」に斜線を引いた賢治が、ロレンスの言う意味での「俗人」でなかつたことは明らかであらう。

註1 昭和七年六月二十一日母木光あて書簡参照

註2

妹トシがカンパネラのモデルとなつたことには「ふりかへつて見ましたらそのいままでのカンパネラの座つていた席にもカンパネラの形は見えずジョバンニはまるで鉄砲丸のやうに立ちあがりました。」(傍線引用者)という描写が「手紙四」「永訣の朝」のそれに類似することをはじめ、多くの照明が当てられている。しかし、カンパネラとトシは対極の存在でもある。カンパネラが友人のために命を落すのに對し、「(うまれてくるたて／こんどはこたにわりやのごとばかりでくるしまなあよにうまれてくる)」「(「永訣の朝」)という痛切な言葉にあるように、トシはそれとは対照的な死を迎えたからである。逆に、カンパネラの他者のための死はトシのこの願いの造形だと考へることも不可能ではないが、右のような意味でも、本論ではひとまず主人公と作者、登場人物と作者ゆかりの人々とを切りはなしてみたいのである。

- 註3 丸谷才一「徴兵忌避者としての夏目漱石」(『展望』昭和44年6月)
- 註4 草下英明「宮沢賢治研究叢書Ⅰ宮沢賢治と星」(学芸書林昭和50年4月) 参照
- 註5 「黙示録」の概要については次のものを中心に参照した。
 「矢内原忠雄聖書講義Ⅳ黙示録」(岩波書店 昭和53年3月 初出角川書店 昭和25年12月)
 「NTD新約聖書註解Ⅱヨハネの黙示録」(NTD新約聖書註解刊行会 昭和48年12月)
 関根正雄、新見宏「聖書の世界別巻Ⅰ旧約Ⅰ知恵と黙示」(講談社 昭和49年6月)
- 註6 D・H・ロレンス「現代人は愛しうるか」(原題「アポカリプス論」)(福田恒存訳 中公文庫 昭和57年6月)
- 註7 岩本 裕「日常仏教語」(中公新書 昭和47年6月)
- 註8 研究者の間で問題にされて来たところであるが、原稿はまざれもなく「ハルレヤ」と書かれていることが確認されている。